

愛知県東部方言の文末詞の研究(3)

——ニの用法について——

嶺 田 明 美

1. はじめに

愛知県東部方言の特徴的な文末詞のひとつに、ニがある。ニは性差や世代差にかかわらず、広く使用されている。

ニについては、佐藤(1958, 1971)が、「告知」の「ニ(ニー)」が伊勢、志摩、尾張、三河、美濃の各地域を中心に、その周辺部まで広く行われていることを指摘している。佐藤氏のいう「告知」とは、「相手の知らないこと、気づかないでいることなどについて告知知らせる」ことであり、「くわしくは教示であり、注意喚起であり、抑止であり、表示」である。友定(1981)は、「告知用法」を持つニが中部地方全域に見られ、中国地方には散在すると述べている。吉川(1972)は、豊橋地方の完了表現の記述で、「主観的に完了を通告するものとして、『…に』(いいに)『…だに』(いくだに)等をつかう」と述べている。つまり、ニは主観的な情報を通告するものということと思われる(注1)。

ニは、話し手が聞き手になんらかの「告知」や「通告」をする機能を持つというこれらの論考をふまえて、愛知県東部方言におけるニを共通語で用いられる文末詞「よ」と比較しつつ、談話資料の用例と臨地調査および内省に基づき、検証した。また、同じような意味用法を持つ文末詞ヨとの使い分けについても観察を試みた。

ニは、文末において、上昇のイントネーションをとったり、非上昇のイントネーションをとったりする。それらのイントネーションとのかかわりについても併せて考察した。

2. 談話資料と調査について

扱った資料は、対象地で収録された談話を文字化した山口(1996a, 1996b, 1997a, 1997b, 1999a, 1999b), 1999年12月に収録した愛知県豊橋市出身(1976生まれ)の女性2名(AおよびR)による談話, 2003年8月と12月に愛知県南設楽郡で行った対面調査をもとに考察した。対面調査のインフォーマントは、当地生え抜きの男性(1935生まれ)S, 女性(1935生まれ)N, 女性(1967生まれ)Yである。対面調査のインフォーマントの回答は、それぞれのイニシャルで表記する。

3. 意味用法について

ニの意味用法について、用例をもとに見ていくことにする。

豊橋市出身の女性同士の会話ではニの用例は現れなかったが、対面調査でYが用いていたことから、若年層が全く用いないということではない。

3-1. 接 続

接続であるが、動詞終止形、形容詞には、共通語の「よ」とほぼ同様の接続をする。ただし、形容動詞に関しては、共通語では、語幹に「よ」が接続した、おもに女性が用いる形があるが（例：静かよ）、対象地では、この形は見られず、終止形にニが接続する（例：静ダニ）。また、共通語では動詞の命令形や志向形に「よ」が接続するが、後述するように、対象地では命令形や志向形にニは接続しない。

また、共通語では、「～よね」のように、「よ」と「ね」が共起し、念押しや確認のようなモダリティを持つが（例：書くよね）、対象地では、ニとネが共起する場合は限られる。これについては、「4-1」で述べる。また、丁寧体「～です・ます」とも、「告知・通告」の意味においては共起しない（例：*行キマスニ）。

3-2. 共通語の「よ」との比較

山口氏の談話資料では、ニを共通語に訳した場合は「よ」をあてている。確かに、「よ」相当としての機能を持つが、用法のずれがあると思われる。その点を、共通語の「よ」の機能をもとに考えてい。

「よ」については、多くの論考がある。「よ」の研究が目的ではないので、それぞれの論の違いなどについて詳述はしないが、多くは、「ね」と「よ」を比較し、話し手と聞き手の間で、「ね」や「よ」で導かれる情報や知識のずれの点から論じられている。メイナード（1993）は、「情報の相対的所有度」を話し手が独占している場合か、話し手の情報量の方が聞き手の情報量より多い場合に「よ」が用いられるとしている。

この点から対象地のニを見てみる。

(1) (傘を持たずに外出しようとする人に)

「ホイ、雨ダニ（おい、雨だよ）。傘持ッテ行キン（傘、持って行きなさい）」

このように、話し手だけが雨であることを知っている場合には用いることができる。一方、外で出会った場合など、聞き手が雨であることを知っている場合には「雨ダニ」とは言えない。共通語のヨと同様に、話し手に情報がある場合に、ニが選ばれることがわかる。

山口氏の談話資料にはつぎの(2)～(8)の発話が記録されている。()内の共通語はこの資料によるものである。< >内の記述と下線は筆者による。

(2) 山口（1996a）<念仏踊りを無形文化財に指定することに反対していると、調査者に話す場面>

ワシ イッモイットルダニ 「ヨセヨソソナシ」

<僕、いつも言っているんだよ、よせよ、そんなの>

(3) 山口（1996b）オ「チャモ モッテキテアル」ニ <お茶も持ってきて>（あるよ）

(4) 山口（1997b）<猫が障子を開けたことを調査者に話す場面>

イッボン 「ゼンブ アイチャッタニ ホー （1本全部開いちゃったよ、おい）

(5) 山口（1999a）<BがDに対して発言する場面>

B：ホレ オ「イジ」ニ D：オ「イジ」ヨ「ネ」 <B：それおいしいよ D：おいしいよね>

(6) 山口（1999a）<相手が籤の値段が50銭ぐらいたと言ったのに対して>

イ「マーゴジッセンワ ナイニ」 <今、50銭はないよ>

(7) 山口 (1999b) <筏の仕事をしていて>

ソリヤー ア「ブナイト」キモアッタダ_二 (危ないときもあったんですよ)

(8) 山口 (1999b) <筏の仕事をしていて>

コ「ワイントキン」ア「ッタダ_二 (怖いときがあったよ)

(2)～(8)の用例も、それぞれ話し手側の持つ情報を聞き手に伝達するものである。

陳 (1987) は、『『よ』は聞き手と話し手の認識のギャップを話し手が情報を伝えるというかたちでうめるときに使われる』としている。陳氏も、「話し手が既に認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるときに使われる終助詞」としている点では、先の例と共通である。陳氏は、命令、禁止、希求の表現においても「よ」が接続し、話し手と聞き手の間の情報のギャップをうめる機能を果たしているともしている。

つぎのように、共通語ではそれぞれの表現には「よ」が接続する。

(9) 早く起きろよ (命令)

(10) そっちに行っちゃいけないよ, いけませんよ (禁止)

(11) 私は水が飲みたいよ (希求)

(9)～(11)の文をそれぞれ、何と云うか調査したところ、つぎのような回答を得た。

命令 (12) N: 早く起キリンヨ (女性の回答) (13) S: 早く起キロヨ (男性の回答)

禁止 (14) N: ソッチニ行ッチャー アカン_二 (15) S: ソッチニ行ッチャー アカンヨ

(16) S: ソッチニ行ッチャー アカンゾ

(17) Y: ソッチニ行ッチャー ダメダ_二 (18) Y: ソッチニ行ッチャー ダメダヨ

(注2)

希求 (19) S: 水ガ飲ミタイダー (20) Y: 水ガ飲ミタイヤー

禁止の表現には(14)(17)のように二が用いられたが(注2), 命令と希求には用いられなかった。陳氏は命令や希求の表現にも、話し手と聞き手の判断のギャップを埋める機能があるとしているが、このような表現の場合、二はその機能を発揮しないようである。ただし、(11)希求の表現は、「よ」の意味ではない二は用いられることがある。「4-1-2. 聞き手の反応への期待(非上昇)」で述べる。

共通語では勧誘表現や依頼の表現にも「よ」が用いられる。

勧誘 (21) いっしょに行こうよ

依頼 (22) 窓を開けてよ

これは

勧誘 (23) N: イッショニ行カマイカ (24) Y: イッショニ行クマイ

依頼 (25) N: 窓 開ケトクレンヨ (26) Y: ネー, 窓 開アケテヨ

という回答で、二は使われなかった。

益岡 (1991) は、命令・禁止・依頼・勧誘の表現を「訴え型」とよんでいる。「訴え型」は話し手と聞き手の意向の不一致を明示するという。また、仁田 (1991) は命令や勧誘を「働きかけ」、意志・希望・願望を「表出」のモダリティとよんでいる。このような、禁止をのぞいた文には二は接続しない。

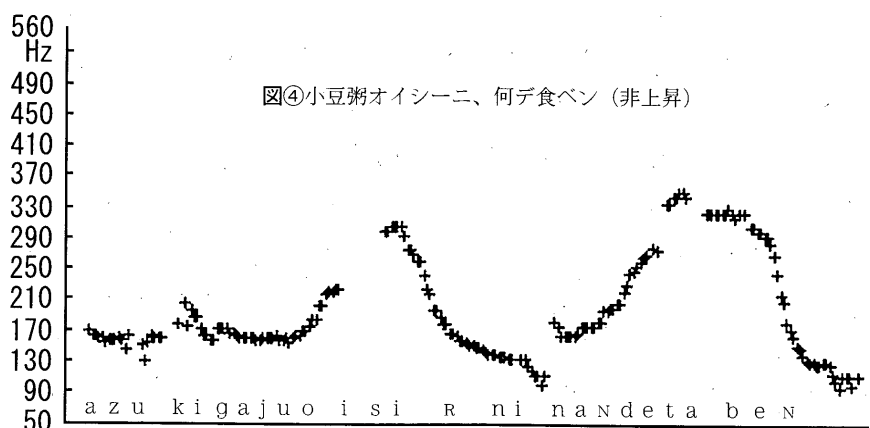
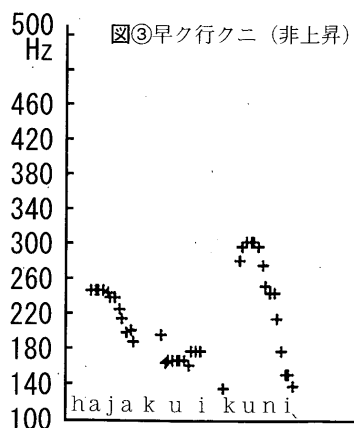
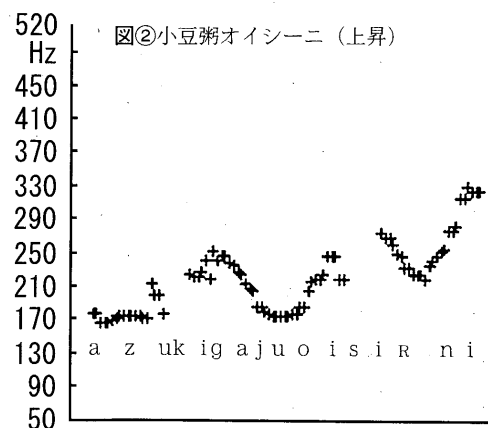
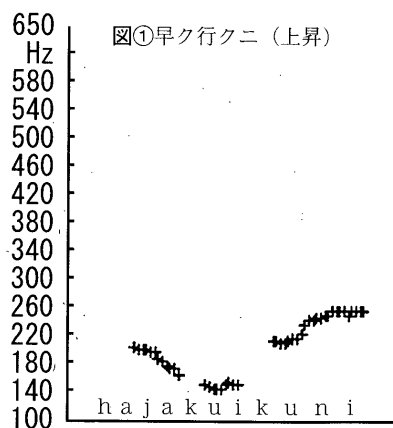
禁止文は、例えば、(10)のように、「そっちに行くこと」が「いけないこと」であることを、聞き

手は知らないのであり、それを話し手が伝達することであるので、他の「訴え型」の文とは性格を異にするのだと思われる。禁止文でも、「そっちに行くなよ」のような表現の場合は、二は接続しない。以上のように、共通語の「よ」の持つ機能のうち、聞き手にとって未知の情報を話し手が伝達するときだけに用いられることがわかる。

4. 文末のイントネーション

二が文末にある場合に現れるイントネーションのうち、上昇と非上昇について、見ていくことにする。つぎの図①～図④の用例は、インフォーマント N によるものである。イントネーションの分析には「杉スピーチアナライザー」(杉藤美代子監修, 音声言語研究所・アニモ制作)を用いた。

動詞「行く」(アクセントは、い「く」)と形容詞「美味しい」(アクセントは、おい「じ」い)の2語を調査した。①は「行く/iku/」の /ku/ からゆるやかに二にかけて上昇するイントネーション、②は「おいしい/oisiR/」の語末 /R/ まで下降し、二の部分が上昇するイントネーションである。③は「行く」の語末の /u/ から続いて二が下降するイントネーション、④は「おいしい」の /iR/ の部分から二が続けて下降するイントネーションである。



上昇イントネーションと非上昇イントネーションのモダリティはどのようなものであろうか。

4-1. 情報の提供（上昇）と聞き手の反応への期待（非上昇）

4-1-1. 情報の提供

新しい情報を聞き手に提示する場合、二がある場合と、ない場合とを考えてみたい。

(27) 行く {二/φ}

(28) おいしい {二/φ} (φ:二がつかない形式を表す)

φ形式の場合は、それぞれの事実や事態の単なる報告でしかない。図①、図②のような上昇のイントネーションを持つ二が付加されると、「行く」という話し手の状況や意志の提示、「おいしい」という判断や感想の提示などが加わる。

4-1-2. 聞き手の反応への期待（非上昇）

非上昇のイントネーションが付加された場合は、話し手の状況や意志の提示、判断や感想を聞き手に与えるだけでなく、聞き手の行動や考えなどが話し手の行動や考えに反しており、さらに、話し手は、相反しているそれらの行動や意見などを修正するために、聞き手の何らかの反応を期待する要素が加わると思われる。小山（1997）は、「よ」は、話し手と聞き手の間に「認識の差」があり、イントネーションが「降調」をとる場合は、認識の「食い違い」や「意向の対立が示され」としており、これと同様の働きをするものと思われる。

インフォーマントNは、図④「オイシーニ」（非上昇）のイントネーションの文のあと、「何デ食ベン」と文を続けた。N自身、「下げたままで終わるのは、少し落ち着かない感じがする」とコメントしている。

高瀬（1958）は、二を「本来『のに』の意味を持った逆接の接続助詞から転成したものであろう」と述べている。佐藤（1971）では、二の出自について、「接続助詞（おおもとは格助詞とされる）からの転成」で、「接続助詞『ニ』が文末に位置することがしげくおこなわれるうちに、訴えの機能を持つ文末詞化がおこり」、「文末詞として見てよいものに、そのまま移ったものである」と述べている。佐藤氏のあげた例文は、三重県下のもので、「ヤメトキー。ホコリガタツニ。」の例をあげている。この例は、高瀬氏のいう「逆接の接続助詞」ではなく、順接の接続の例である。佐藤氏は、「接続助詞『ニ』は必ずしもいわゆる順接ばかりではなく、逆接にも働くはずである」とし、愛知県下における二の出自を、「逆接の『ニ』からの転成も一方ではおこりえているかもしれない」としている。さらに「文尾の『ニ』をしりあがりと言うようであれば、いっそう文末詞化は促進されることになる」と述べている。佐藤氏の言う「しりあがり」は、上昇のイントネーションと見てよからう。上昇のイントネーションをとる二が「訴えの機能を持つことにつながり、一方で非上昇のイントネーションは、佐藤氏や高瀬氏のいうように、接続助詞からの転成であり、「のに」や「から」の意味を持つ二であるといえよう。④の非上昇のイントネーションの例は、「小豆粥おいしいのに、なぜ食べないのか」となり、この場合は、聞き手が話し手の意に反して、小豆粥を食べないでいることに対して、小豆粥を食べることを期待する二であると考えられる。

つぎのような例が山口氏の談話資料にある。

(30) 山口（1997a）＜子供がふざけていて、騒がしいのを注意したことを話す場面＞

ヨシミガ 「マ^ーヨ^シン ヤカマ^ジニ^ニッテユ^ーダ^ダガ キ^キャ^ーヘン^ンジャ^ン

＜よしみ（人名）が、「もう、よしなさい、やかましいニ」って言うんだが、聞きはしないんだ＞

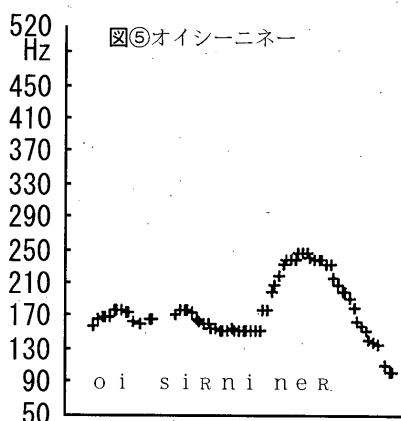
この二は「よ」とも置き換えが可能だが、順接の確定条件を表す「から」とも置き換えが可能である。「アクセントエーション」からもわかるように、二は非上昇のイントネーションをとる。国立国語研究所(1989)の第35図「だから(言ったじゃないか)」, 第37図「子どもなので(わからなかった)」の「から／ので」にあたる部分を対象地では、二がデなどと併用されていることが示されている。

非上昇のイントネーションをとる場合に現れる二に、先述したように、逆接の意味を表す場合もあるが、(30)の例のように、順接の接続の場合もある。佐藤氏の述べているところと一致する。

さて、「3-1. 接続」で、共通語が「～ヨネ」が念押し、確認などモダリティを持ち、このモダリティで二とネは共起しない、と述べた。しかし、つぎのような例もある。

(31) ナンデ食ベンノ、オイシーニネー

くなぜ食べないの?おいしいのにねえ>



図⑤は、「オイシーニネー」の部分のイントネーションである。二の部分是非上昇、「ネー/ner/」の/n/から/e/にかけて上昇し、/er/の部分で下降するイントネーションである。この場合の、二は接続助詞としての「のに」の意味で用いられている。このように、二が「よ」の意味でなく、接続助詞「のに」の意味で用いられる場合には、二とネが共起するようである。

「3-2. 共通語の『よ』との比較」で、命令・禁止・依頼・勧誘の表現に二が接続しないとも述べたが、共通語でもつぎの例のように、命令・禁止・勧誘・依頼の表現には、「のに」「から」は接続しない。

- (9') 早く起きろ {よ/*のに/*から} (命令)
- (10') そっちに行くな {よ/*のに/*から} (禁止)
- (21) いっしょに行こう {よ/*のに/*から} (勧誘)
- (22) 窓を開けて {よ/*のに/*から} (依頼)

二がこれらの表現に用いられないのは、接続助詞からの出自であることがその要因と考えられるのではないだろうか。ただし、希求の表現は

- (11') 私は水が飲みたい {よ/*のに/*から}

のように、「のに」「から」を用いることができる。対象地でも、「水が飲みたい二<のに>、なんで飲ませてくれないのか」「水が飲みたい二<から>、ちょっと休もう」のように用いることができる。

先の文例に戻って、つぎの通りにまとめる。それぞれの例文の二に後件が続くかどうか、続く後件によって二の解釈が異なる。

- (27') 行くニ {(a) 早くおいでん<早く来なさい>/ (b) なにしとる<何している>/ (c)。}

- (28') おいしいニ {(a) 食べりん<食べなさい>/ (b) なんて食べん<なぜ食べない>/ (c)。}

後件が、(a)であるならば、順接の接続助詞「から」、(b)であるならば、逆接の接続助詞「のに」、(c)ならば、文末詞「よ」と解釈できる。いずれも、聞き手が話し手の意に反した行動や考えを持ってい

るのに対し、前件を二で述べることによって、聞き手が相反した行動や考えを修正し、何らかの反応をすることを期待しての発話となる。(c)の場合であっても、非上昇のイントネーションをとれば、例えば、(27')ならば、聞き手は、「行く」ことを認知し、それに同行するとか、同行しないとかを表明することを期待し、(28')ならば、「おいしい」という情報を得て、食べるとか食べないとかを表明することを、話し手は期待することを表す。(注3)

4-2. 同意 (非上昇)

山口氏の用例(2)を前後の文を加えて再掲する。

(2) <籤の値段の話>

B: ワシャ¹ ダアノ ゴジッセンカ ロクジッセンダカ (笑い) ゴジッセンワ ナイワノン

(僕は、あの、50銭か60銭だか (笑い)、50銭はないわいねえ>

D: イ¹マーゴジッセンワ ナイニ <今、50銭はないよ>

Bは～ノンの形式でDに同意を求め、Dは、「ない」という事実を判断し、Bに同意している。

臨地調査でNに、「50銭は今、ないねえ」と言われた場合、どのように答えるか、調査したところ、

(31) ソ¹リャー ナイニ

のように下降のイントネーションであった。

相手が何らかの同意を求めてきた場合、それに同意する場合は、非上昇のイントネーションが現れるようである。上昇のイントネーションをとった場合は、単なる同意ではなく、そこに話し手の判断や意志などを加え、聞き手に新しい情報として提示する機能を持つものと思われる。

5. まとめと課題

以上のように、二には、①話し手だけが持つ情報を聞き手に提供する用法、②接続助詞として用いられ、話し手が聞き手の反応への期待する用法、③同意、などの用法を持つことを述べてきた。

しかし、先の談話資料(1)のDの発話にあるように、対象地では、ヨも用いられる。二と同じように、聞き手の知らない情報を伝達する際に用いられるヨとはどのように使い分けがあるのか、という点がまた明らかでない。これについては、ヨの用法を観察して比較をしたいと考えている。

また、接続助詞「から」の意味を持つと述べたが、対象地では、同じような意味を持つ接続助詞があり(『方言文法全国地図』第33図「(雨が) 降っているから」では、デだけが分布している)、その差異についても探りたい。

さらに、他の助詞や助動詞との共起関係についても考察をしたい。

【注記】

(注1) 吉川氏は、通告の用法として、ゾ・ゾンもあるとしている。高年層の発話には現れたが、若～壮年層のA, R, Yの発話には現れなかった。ただし、高年層でも、ゾは男性が主に用いる。ゾ・ゾンは「ぞ」に相当すると思われる。「ぞ」は陳氏によれば、「あいてが、何らかの行為をすることを期待しての発言であって、あいてへのくいこみは『よ』よりもつよい」という。二とゾの違いについては、陳氏の言う「ぞ」の機能と一致するかは、検証しなければならないが、それは別の機会にしたい。また、佐藤氏、友定氏は、勧誘の表現に「二」が用いられるのは近畿の東部だけであるとしている。

- (注2) 丁寧体「いけません」+「よ」の形についてであるが、先述したように、丁寧体の「です・ます」にはニは接続しない。(＊ソッチニ行ッチャー イケマセンニ)。丁寧体を用いるとすれば、N:ソッチニ行ッチャーダメデスヨ/イケマセンヨとなるが、共通語的である。
- (注3) 共通語の「よ」に伴うイントネーションの解釈についてであるが、森山(1999)は、写真を撮る場合に「動かないでよ」と言うが、上昇のイントネーションをとれば、「相手の反応を伺いつつ、その注意を引くという意味になり、多くの場合、聞き手に知らせるというニュアンスになる」。命令文において、「下降」のイントネーションをとる場合は、「聞き手の注意を引きつつも、イントネーションによってその聞き手の反応を窺わない」つまり、「無理やり注意させるような意味が合成される」としている。ニが共通語の「よ」と解釈できるような、(27')(28')の「(c)。」のような場合、この論と矛盾するようであるが、森山氏の例は、命令文においてであり、対象地では、命令形にニが接続しないことと、出自を接続助詞であることを考えると、共通語の「よ」の例にそのまま、あてはめることはできないと思われる。

【参考文献】

- 山口幸洋 (1996a)「愛知県方言談話資料」(2) 北設楽郡設楽町平山方言 (塚田哲治『Aqua』18)
- (1996b)「愛知県方言談話資料」(2) 北設楽郡津具村笹原方言 (塚田哲治『Aqua』18)
- (1997a)「愛知県方言談話資料」(3) 豊橋市東部方言 (塚田哲治『Aqua』19)
- (1997b)「愛知県方言談話資料」(4) 宝飯郡小坂井町小坂井方言 (塚田哲治『Aqua』20)
- (1999a)「愛知県方言談話資料」(7) 新城市平井方言 (塚田哲治『Aqua』24)
- (1999b)「愛知県方言談話資料」(8) 北設楽郡富山村市原方言 (塚田哲治『Aqua』25)
- 高瀬徳雄 (1958)「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』1 広島大学国語研究室内方言研究会)
- 佐藤虎男 (1958)「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』1 広島大学国語研究室内方言研究会)
- (1971)「転成文末詞『ニ(ニー)』について」(『国文学攷』57 広島大学)
- 吉川利明 (1972)「語法(完了・通告)」(吉川利明・山口幸洋『豊橋地方の方言』豊橋文化協会)
- メイナード・泉子 (1993)「会話のことは」(『会話分析』くろしお出版)
- 友定賢治 (1981)「転成文末詞『ニ(ニー)』の分布について -中国地方を中心に-」(『島大國文』10 島大國文会)
- 陳常好 (1987)「終助詞 -話し手と聞き手のギャップをうめるための文節辞-」(『日本語学』vol.6 no.10 明治書院)
- 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 金水敏 (1993)「終助詞ヨ・ネ」(『言語』vol.22 no.4 大修館書店)
- 国立国語研究所 (1989)『方言文法全国地図』1 (大蔵省印刷局)
- 小山哲春 (1997)「文末詞と文末イントネーション」(音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版)
- 森山卓郎 (1999)「モダリティとイントネーション」(『言語』vol.28 no.6 大修館書店)

(みねだ あけみ 日本語日文学科)